新著閒集

文学
13
75

從十五卷
至十八卷

へ13
1184
6

へ813
號 1184
冬 6

新著聞集

十五

才智篇第十五

島田藏書

途を仰ぐ難を救ひ墓を拔て急を辨す

句を賡時を視す

春日野の鹿の觜を

若き人を討の方便

亀を放活をす

盜賊の別

巧智一言難の難をすく

牛糞を煎て治す

巣穴蛇を燻せ出す

感随和尚悪人の終を化す

詠歌なでやかに紀明す

巧智争を解く

官家獄中の糸尸を

兄弟山を争ふを巧言の解をきく

念仏滝の謀老父を救化す

釣を治て咽よく入

穢を治て咽ふ入る

胡椒一合ばかりを治す

碁石墨一つ入る

尾州小真甫餅の食傷を療す

文後生涯乃佛法ニ世事ヲ離ル
善心悪心多ク悪心ヲ翻ス念仏題目ヲ唱ヘ彼ノ善為ニ業ヲ転ジ
警悟ニ入ル名ヲ同シ仏ノ我家ノ故ニ化宗ニ入ル通ハ
一宗ニ分ル名ヲ同シ仏ノ我家ノ故ニ化宗ニ入ル通ハ
毎朝ノ教ニ善悪俱ニ我ヲ忘ル是ヲ以テ
改ニ同シ文章通ノ書ヒシ物ノ疾名ヲ
彼ニ一切ノ経ヲ知ル一心世界ニ通ス
当体即チ仏ノ意多ク已ニ悟ル義ニ仏ノ佛陀ノ如ク神論ヲ
説教ヲ云ハ善悪ニ両通ス其ヲ
ヲ云ヘル文殊ト名ヲ故離ヲ
欲ハ生ヲ捨ヌ悪ヘ悪ヘ悟ヲ
情ヲ多ク戯ニ仏ヲ亡ヒ一宗ヲ依
一宗ヲ亡ヒ善悪ニ我ヲ忘ノ名ヲ
初ノ一ニ我ヲ業ヲ

一称念仏純教ノ
日蓮宗流 妙本寺

金ヲ仰ヒ難ヲ救ヒ薬ヲ扱テ急ヲ辨ス
武府大火ノ時餘烟ヲ
しる任案ノ多ノ女中遠ヲ
ちらばりしぞ又松平伊
ヲ面ヒ出ヲ
ヲ面ヘト教ラル
逃ル出急難ヲ
治メヲ仏ノ如ク
しみ薬ヲ

伊豆のもの海おを立はなれ次第に
破り抜出して
向ふ虜時を祝す
一條攝政兼良公十二歳の
虚空を飛ものを見て
猿のやうなるえぼし
又笑しく頓て縁の方より走り出
え脂ハ未だ
と附きもとるとや

似たる
なほ少へるとや幼きはうりかはに
其日暮の鹿の角をきる

奈良の其日暮の鹿ハ古より人を損ずる
みて民の患みて
遠に至をおそれひきて角を切
をきれバ東大寺興福寺の僧徒神獣を損ずる
のおそうずる
いく角乃ち者ハ角を切人噉ふ馬ハ耳を割

とくの聖賢の捉ちて八九月にもて稼多
お給をせ切らせらる〻ハ角を切よし海の
方へ引仰事鋸みて切り雑作なり若
紙よるせ切んとハ強力もれなひかとこるへ
今ニ至りてハ給給ふもいろ〳〵好ものてて
好し

若き人を誡の方便

松平下総守家中の採井七ニ至るまにて
ま三ふとしまるせしハ人心を悠にも

く地ごと祈ぬうて奥屋従りめさりしハ
吉十ふとしハ屋従りしハ人ハ念ひもの
ちるといふ名ちあらんま家多のへを叙の
七ニ至けるまきぬの毎名をとて狼かく
ひやうちのうへ仰鰯の口よりもれ家
しくおりいろ色にも出さじおもひし
ま家ハ吉十多ハ山形にかり
しが時をめうとしよりさ
なきる云訳をするかとに親のかも今ハ一向う

表門より出て裏門より入れば本に復りたる
と珍重刀を収めて裏門より表門
ようへと云届け頓て近辺より松平
相摸守殿よりの下使なもおよびて
使者二人出ばでて参られ
て殿より人をはるに今朝よりかくら
すくひ厳重に警衛申つけ
求めもれど吉平発覚
おどろきなり議しみ取門
いつまも云ひ争ふべき法も
なりいろくへおもはくもあ
方よりかくよ頭
まびく使をもつれ
出しまゐりて屋敷
かく所神妙なり若もの
うた

亀次郎活をし
おもう頭なく家来

沼亀を喰セハ死るべきにてそれハ亀
辛労を取ものめ庭の池へ放ち用の時
出てとらんと已ぐらお宮をほり深く隠し君
ゆるしを乞ひ捜せ共ゆくへ知れず
ざるに二つ三つ既に数へ帰らん
時先祖へ参詣をなしまた次の
日より亀を池の行きおとなく罪を
悔しうはなはだ苦しく数日
べきやうを工夫人果て数日

きるとて出る
盗賊別条
伏見お慶の方へ参り馬盗人を
して縛て捕へ
来跡一匹てお
時は黒赤栗毛
そもんを胴中
追う事ても
とはざるとや

巧智一言教誡の録をすゝめ

尾州黄門公の納戸の金二百両をぬすみ

うばゝまこうを嚢ぎ巧をたゝかはしの中刃

のつゞらまびりをぬすむ似合ばるいろく

をもれバいよ〳〵おもしろきへハ小納戸の

ものゝ物干竿よりまきりしとゝまぬ悟き

ます多かしこゞ今度の新刀人きりて

あゝ永たゝ後よ五郎吉尾士作る粉と

して永く出ざるべしとて則わ

ちの新刀を一腰の士作ちかう一腰のもし

多くて八形ちを向ふ頭て肉体

なくて八形ちを向ふ頭て肉体

第四くゝへるまを投人ものゝ陰めて

ようますくめて自害ちれバとて大名の一家

八安堵ちれバとちんかく接扨ましきろい

かくち武誉ある人ゝ悪名とゝくハ一おの士の

ほゝおゞ〳〵ちう仰てこゝのゝ出ませく

かゝ〳〵そのまゝとう実録十三ゝの勤のまく

牛玄

身く飛ばしし頃てゆうそのも蛇まよう
巣の口よりすれが報ようん
口よりて巣の口より出れいものまく蛇逃く
るようくよりて人ろまりに憎
まりてわりひ蛇を教せーに巣よりめを
なもーゆくまれをうんいは蚰蜒ろう処室え
ひのようてゆしゆ蛇の蚰蜒をそや
ようまいよーてうそうんいとりまの
ろうてんうしし

感随和尚悪人の終と化す

ゆ日本指ちくに有福のその後世ていりのを
ろでてま期ちづきて卑く称名で
ちりもちうし憐絶ですめよんすい一家挙て称びく
和当まうまよう病人出書ろのう財宝のう
ものこりう和当のいうて健せち
あのすかうま居病人の霖せまちて働乃
きなのめを元の手振よある縄まても元書

まるしく都上ゆ
かう智争を解
ひる浪人異見で質ぬ
の捨ものをおぬ
うた頓て亂を生捕て
おれん我をうけきて
公儀へ訴へ
拷問仕ものを
徒ものをうへまうう

常もし智ぬづまかうして
けて造のおぜしを書て
へかんどまうり

官家獄中の故尸
尾州の町をもり捨ろ
七作ろくまうて竈死
常職ゆまうて
ふうして七作ろの
角よおよりず但し

やうやう
ぬ
天竺孫七作尾
の者ありうまハ先親
相
先例の無法
者科の法定

きそひ科(とが)梅(きりま)うるを太令(まて)ざるうへ助(まも)うる
をもかうもんみふ子(こ)細(ぐわ)ゆへ訴(うつた)へもうしん
して非(ひだ)分(ん)よりもうへ紛(まぎ)らハ冤罪(ざいくわ)
きわまりうる者(もの)すべて理(ことわり)あるうへハ将来(しやうらい)の
者(もの)をめすべきものにあらず不敬(ふけい)の
しそのものれい芳(かう)ざうこと
の者のみすべて死罪(しざい)
ふびんがりぎ
みきのうしろまで

結ぶ糸をこしらえる細
よりあわせる縄をこしらえる
況や糸縄をこしらえるのおそくしてはかどらざるときは
仕ずれて納ふ大イなる迷惑ですぐにできぬしかの者あだしに
夢て立帰りまたよびに山ぢのそだちの老
しん殿のかくまひかくしおもしろく何ら
急ぐ事そもそも本家の老母を尋ね
念仏縄の業老母を救ひ

摂州池田ちかき栄根村の父甚兵衛
老てお屋敷に隠居せしが後世の為に遠
くうもれ本家の老母を尋ね郷
おもてのもとへかくをうけひろめ新たち
ぬるまでかくしてをきぬ明ればうりの高松
五郎谷にて念仏縄とて藁にて細縄をこしらえ
ハそれよりき隠居のまでとりあつめ
縄てのがをへしてみかをものす

ぎも乳海ぐ陽て
べまりもを繩も
しゆく八百ぐまの
うちはもく
よくくまて
今度八案ず純一
ぬ了念仏の貴き
修者となりこの
如く知像

釣の咽よへるを
る童ぐりやまりて
ひ案くく撞
うに部口よし
まんがおのまく
穂の咽よへる
ひる者まの穂の咽く
のしやくまりを
胡摘よひぜ

佐久男蝨をうつくしがりて息つく時胡椒の粉
よめうしやんで絶死せるやうになりぬ人口
はぶてをぢいへるがごとし藥はつかはしとる
蕎石鼠子
ろくへたゞれおれき蕎石云鼠の孔ごと
ぶ傾てしも紙ようそーて
一方の孔ごへりんはふそうして石ごと
尾州の眞甫餘の食傷を療ず
尾州名古屋みて万る人餘の蛔虫を喰て
食傷血のかりしを医療かりくる
せーてそうしてそうしみ真甫と云し
唐人万しご書り見て頓て乳蛛なを碎き
こぼり付そ口よのしてしてしと也

新著聞集

清直篇 第十六

継子嫡しくする
酒人切膜

阿州の大守賣紙を禁制す

二孤命を伏し盗の狐を縛まる

陳侯政宗
二夫婦を伏し処を
空地活て多田地をうく

狐君命を懼る

高債の華嚢本いうる

人を海参に
賄賂にふける法のなく
柿菓をうるまかて
貧戸うりがりて己が海を出す
雲君縦僕はさよ卿の屐を帯
美中に狐来りて自ら誤る諺ばのうそを訴よ
財をもとめて恥をかく
秘符病を癒し却て家昔をわろむ

結を媚とし
阿刀家中に三浦ふるとよ人きるしてのち
後家をまて設寺すでに四も長しに老るとも孫
ちまでいくとまの孫助ちまいは葉を喜ほ」
きるふるの句海をう今すでに病へせしうへ
ゐをおぬ「そんるなれをうるめ葉のい
あねうと強うり云をれいふるまかて一族
のうるし集て自ら死なの蔭てうう
しゐと長ちまくいふるにゆゆう

孫今之愛を
口有きうり士
沒そう
あるまじきなくね今そ
と発ちいきさん
と葛ぐすべきとかすしくせしそ
とかくすべきよりばとそ
狐君今と

仰のごとくつまづきこけの畜類大君の尊命を
ふくだやうのものをかくへ云もさてすま
ざるにあの人はりふき

浪人切腹

此ごろの世なみの廣言する人まつて云ふ新聞」
某は小川三郎浪人みそれの多く不肖ふへた
當時を名とするものこと沙汰しあるよ
うに「當世は仰ぐ者多くあつて面ぎれへば
法外なきびれものとて誰をなのむ

へき仰ぐもなく一命をさこしやう情をも
切をもまふるものバあの怪しいもの
も聊爾申もあるまじ
たいまでやすべきいかもなく
まにあるものバ家法のかくこそ
きうくつ紙こそ思いきりて
場代のつぐ多ちれバ純朴なる峰吉さんは
なりかきなる案内
ぶの場合もとよみ

を治めしそて白銀三十枚下さるゝ
三方の器ていく〳〵如の義全く金銀の至
すく〳〵しくもなく後きこのみつ
集て見るにあるもやすさく本編の
なる世よりの毎に金銀ハまた金拾の
まく堀よしもし文ハ紙はなれ
こゝまてこれおの後
こく式量こそ榜を
なし候う云閑の人
べきはし厳みもきこ
酒をるをそもの
し者とるばいう
そいくともやまを
高債の華嚢本
京室町山王町の雲
異庭を出し考え伯父の方まで古き皮巾
と柵のにぎりひとて重ねる物出のこと
如何のなもそずて責て債を伯

文の字まで書きうつしてかくて下巻を賣るものみた
つるざのもゝ笹ぜい地るきうりかうびてさて
やまぬ二日まてつゐに人まり神ハ山出給ふて
中巻を求ゝ則人々
そのうりさめて女房のもとずして賣まけ
らんとなしおもひ
まふかて云りんバ亭をかまうりうくろこび
去かたにろれんまてたゝするそてふかふ川
運う一条上ル町西がわの北かどにて利益と

阿州德記卿のその土佐のまくこんて紙をすする
なりひ阿州より土佐の業紙すくへきし
やしりれハ紙屋うり家老中より告うしと
阿波も甚きうりて甚紙のるの土佐の名お
なうまの方まて流るべかうず愛てさすき
うりとも曲まるべきにあらとく

二狐命に代し盗狐を縛り来る

丹波亀山の辺にて松平伊賀守殿の領分の百姓共又々多くの小すりを引ちらし金子等乃うへ取て狐の取扱ひ致し候故狐の方にも腹を立くやしがりし時日八ツ頃狐が一疋の書生なものが表の方のおこそ能をして来りしを見て又多くの狐を葛にて縛り友狐二疋ものかつぎの場をこへて縛して来て

松平阿波守殿家来の屋敷へ

念仏無間地獄の業因

他宗の信者百日目の日天より

降伏の上人なる事未だ聞ず

浄土宗の

上人とまり給ひ一句と

会仏とまつ給へ大切の念仏を

字八珠器くすゝめ念仏無間を云てすゝめ
念仏して弥陀の浄土へ参らんがために
らまゝ此身をすて息をすひ切ますて臨終
字のほとめを浄土へ往生せんと願ふ
しん
玄門このそんて観念法門をこのみ
修行せんものは自心の弥陀唯心の浄土
是等の事を能存知して
を上人も今いはるゝ病
をはなれ智恵をうしなひ
云れてあさましき事也

法然宗の邪正

の私を松浦の一念十念往生の
記して一切の人念仏申せば
しとすゝめ申事ハ
阿弥陀仏の本願
字の上ばかりしりて
紀伊の神祇なの百性雑人
りて自力の者の胸を
看病し給ふべき

とも討ち洩れ者ひとり親類と討ち者の一統
をひろめて云しが某不運そうに
みなよりずひろめ諸人にも其時節
べきといへるまゝ公儀
聞届け跡まで世くれ候ようにと望く云々す
討ち者のいくかくれ
くは物ともせず酒
おどしにかりのの
をなすも亜相云きこしめし

ひぬの清ともうるよりの
めしまた十人余の内よりそうひ
両地を討ち
南紀大納言家信八戸弘前の百姓と
出のまゝの形り則ち仕
しうど法令も厳かくぬすびたりして抜取を
ゆるされざるはいうずの法令やうう
ひぐ従のごとく都て他の迷惑
ふもうしおそれまでのてくさを

よりあとしよ法古多いよ威公一意を下う
出しひよ一ひよ一ひよ一

駄菓子屋の弾て拡判す
高砂屋松そう東洞院の角中き境目湯のす
ぐりし松金仔猫や日まを後めうの
青ものや竹ちりん前月のうしめてこくのちの
湯気てまりすめ一匹てのにちき肉こく
ゆうんそて頓てのお見こゆき立ちう女
ひくこんぐらう所仔猫をめて一匹
及ちかつてもめうしき乳を送う
それて湯吸うお仔猫のうの陸の

うれぐらすへつと云ひて飲よ
通白うそうて京童も感へて
柿菓を賣場てたびひ礼をす
備中山のおくお百性の婆
東西指現のきふ産安の柿を宮のうち乃
菓やよ柿百を浸みうまをれより高き
ひきて猿をのりくの店にて
菓や仔んの柿を浸一つ二つ賣しかの
あへくなひまいをそへ歩きいなひの

ゆく秋をすてるよりとまるよりとまるうるさゝぶる時かきゝ悲しもくだり又て
念佛を
中地獄
の霊
を回向
ようとす
業報の
深きを
悲みて
法花の
偈を述
天魔み
法花の
偈の名
を
雲入
りうん
り給ふ
の図
浄土禅
直弘百
天台の
外祖
の宗を
法花宗
と称す
ること
蚊帳
釣る図
国中
なり
過ぎ
ゆく秋をすてるよりとまるよりとまるうるさゝぶる時かきゝ悲しもくだり又て
損ぜんもせずくきうのうとそ
ゆく秋をすてるよりとまるよりとまるうるさゝぶる時かきゝ悲しもくだり又て
損ぜんもせずくきうのうとそ

執権職の政務をおこなう
ようもなのかうもん祈ぐいくハ霊験をしめされる
いよいよ敬度ゆきとどくうで多のいろいろの
ありがたくに過るまき事をたらくんようこと
なのいきおひ権現を勧請し奉り絶威を馬をゆくしを
かぐらを遍やくこうをたくべき旨ハ森敬信
僧はらを呼ひ全服をあらためくのそれくの
ふるまひて頭へをきき自ら
はくまうとする

秘符病を療し却て宗旨を改る心

京かうす丸長者町の
日蓮宗にて
る大せのさなりし
行んこうかう
まち禁祈
うとかうぐくそうし
たりそうとひそうこ
の名号をかきしるし

秘符をかうべらるゝまゝ
祈祷をあんする
毎上の種字の
秘符をひらきそしこ
れよりかきなりひきの

宗旨を改めず誓願寺の坊さまと成

新著聞集

俗談篇第十七

鈍狐害をなむる

隣屋四人二夜二活

悪馬徳を剝る

急節謀言

愚者叮嚀

吉祥寺村妖獣

洛陽小女狂人

夢中に妻を害す

辛东のつざり
不運の賊入りて凶
東光法師回國
妙法蓮花經をよむ
病人文をおのし
猫人のあとをおふ
祖父の墓石乃書
祖父の墓に金をほる
宗旨尊を唱す

貧乏歌を詠て西行を戯論を
墨猫威了れそれて嗜そこへて
鄙俗の門遺書
貧人金をひろひ損
古代質朴
同越の名国越書

鈍狐害をうむる

築お稲荷の御下屋敷より一里ばかり西にて畠村

と云所の百姓弥右衛門と申者方へ毎夜狐来り

て悪さをのみ致候ゆゑ御下屋敷へ訴出候ゆゑ

御役人衆ひるまくらを持参して夜ごとに

かの家へ詰切候へども狐は来らず

作りまゐらせて聞入ず夜ごとに供の僕八人ばかりにて

御役人衆の家へ詰切候ゆゑ

お細をひきうけ八右の目盲をよろこび夢
八左の目盲ふたりして告れハまた
ぜひなきけりかくてふたりとも娘が傍
ふ脇で痛しぬ業とてうらへらをみやひ
うばゝく疫まていたほふやきほく
ふたりしてそれハ左れ目盲をうけてハ
艱もなき妖ものちりしうぶ書かいくしく
もうみよ深もはくいたしまくいたさせよゆと
く祈るのまをそのほうのかてこそを書くく

そこ先眼指を叩きふる声咽上ゆて娘を
猿よりまくこんう手ふ声
鳴くく取をはき教しくと
彼の狐をまくき教しくふる又家来の者共ハ
妖狐くものこをれふしかくし
隣屋にへ二ゆ二活
大坂八りんやの荒ものや芸笠を買ひに深江
村へゆんこて隣の亭主と仰来くく朝さく
出ふを書今日ハ親の命日ふて茶を煮く

[illegible]ゆきをまつ[illegible]
[illegible]ゐてゆくばかし陣の者も戦ひゆく
[illegible]て宿をかりしを書膳をよせて
ハ商ハせねどものうく
めをまへて責[illegible]
出[illegible]書ハ柔を設りて後臺治て[illegible]
みて俄[illegible]雷電[illegible]
雷ハ[illegible]
の書[illegible]

差[illegible]
評しぬ

悪馬徳[illegible]

三州猿投山のふもとに人喰馬ありし時
愚[illegible]和尚[illegible]
[illegible]ひまもなし一まくもり降て後ハ人の
ふみあとのうへの[illegible]
急難謀言

大坂[illegible]陣の[illegible]

入しよ賀修を水よ出して額一人を猶の欄干
より後を突立しにやの者味方見物やありける
にやとよみ味方同士討することをせ
ず敵を引受ひとへに頼て城内へ引入ける
駒をひかへて等の士ハ何と云ぜ汝とう
者者ぞ我ハ方ひの大将摂国多らうと名
乗てそく内にのりしを水走後ますしを
云ひて頬うち落候ぞうれ
愚者呵嘘

西尾国慶ちう説ものいひ
ありまへばいやしんろう話うう
さまい給くまを笑ふまのまて笑ふ
首途の狂体お面いうやせんとて第一をまん出
膝のやちく走る駆を品一うちにやまり
囲刑をめや治きさまいるる科れまのう
おいもうとひまをへばいやの科るきまの
こともを述のうま目のまへおしちをせ
やまんて住うしまへらまうよう憂うの

たわりしものくちハ不通しくそくちん

養甲と書すす

京都と西谷にて代筆あの

ゆめと書を切敷しそびきあるびきかのにし

くと一段されくをおかでおくべきうちハ

きんがし恐しきまでゆるしかんと書

う恨そひハずおもふ九もハ一ぺんと

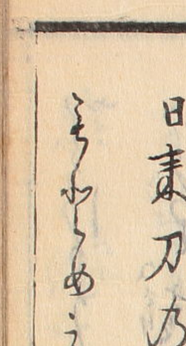
治定をかうひにいとせハ先獄

舎うへまゐる三日勝てやり上をおくうと跡も父母をとらをびん某姫のうハ不住全

とやまひ父ハ女の跡をうひやり候もしんまくさの者の食ひすすうと致きしうを

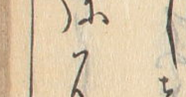
ほとくお九がそやをおろうちん

ちらうバ一段まして一れそう



吉祥寺村実獣

京の南吉祥寺村天女の開帳ありて人群集せり西の門の柱より古鈴金仏を持楽しくそなたこなたに甚賑ん嘯しき獣ありて頓て諸人の口ぐちをめて其かたち面ハ糧の如く額より首ハ黒く脇白く尻丸くして体利き猶のごとく後足ハ長く尾ハ丸くしてお足ハ土竜の手指のごとく犬のごとし鬩ハる人ほこにおりしが延宝年中



海陽長刀坪の町より日暮刀の目利せしまゆみえてもおかしく

亡妻ゆく堪忍せびそて
浄田淨西後きこと矣
おうたひつをとゆるそてゆる母の佛しいひ
ハかるんとなそそ
ひをたいこへのやうびるも序也居代ハ
一月よいひそてあるへ今干当せてきて
ハ後ハ二歩よせよそ
うるのせしそべよ
ねずべかびとかし
意迄よ

名号を訪ねへとまふ喜運のそすべかりび若五もろ
ば急度曲まぶう修行べきてかりしと他不運
のおどをいまん
東行法師回國
ちろう東行こいまふ僧菅屋孫なるとまふ人の
孫のようせ云て修行まて回國ちまりけびし
奥州松浦くわりもくとふへまふ私まり
亜へおやまふ則ちそし出まんこいろく穿鑿を
しめど不行跡のまふ東行ハ西行ふ准て

云ろうんおろハ歌ふむへてそをまんで
礼ろ亜ふふあてうふぬそふ名もやし抱上極る
てやふようしぶうそしまて獄囚に係をて禁獄
せろれうふ也
妙法蓮花經をまふ勧書
法瑞竜本寺日進上人ふ寵篤の頭目を八源次
りようのく私うしをまふまりけるも
仙河浜水尾院妙法蓮花経の文字を寵篤
そめまをまへて日進ふまふ南無の二字と

ほとゝぎす
袁參(えんさん)を
おのが
南(なん)巻の二字(にじ)を
久(ひさ)や一奏(いっそう)
しるせば
痛(つう)へ
ほとゝぎす
杭(くい)木(ぎ)
ほとゝぎす
文盲(もんもう)
ほとゝぎす
ほとゝぎす
ほとゝぎす
猫(ねこ)
ほとゝぎす
ほとゝぎす
ほとゝぎす

祖父の墳墓

かどうものをとんまるあそうう云さうし科道き
やくとして禁獄やうめいとも
宗旨法師僧西廣法のきにもりきられて営の
ひろまるそそて
うきまつ火をいもの水の如くいもてかけのごめんと
うや
深まつ火をうげすほまるれ

賤婦歌を以て西行を戯論す

信州上田とく駅乃ちかくに田中とく郷あり
むかし西行法師仕えて盃を託盃しまきまき
繋うかりき女出て盃来ほいうせしにあもの
そも繋ぎき盃の来るを
と口すさみ給ひしが其の女
繋ぐくば佛をすてく松宝よられ田中のうめの髪に
めくれハ
野狐威よおそれく繋をへす

尾州竹腰山城守家の領
分にて鐘を鋳て狐の穴ごとにふく急き鐘
をかくべし怠りなくバ狐物せんと云をあやう
く聖朝廣の竜と鐘ひろひ
おれハいのち全まき取事しかじと貪慾
それ狐穴の領れ鐘失ふ
いふことそれそうすきがをよくてこれ
ありしとぞ

鄙諺の油断遺書

阿州吉成村の隨泉院ハ日蓮宗にて銀杏
百貫目余くへりもし貞享元年秋の後
やまひづきて葉下に出て癒ず
山よりし茅ぶきそびえ徳嶋勘任町
の百福寺ゑまきて焼香導師みそまきる
百福寺ハ若葉みてわりひづきもなくて
ひ老僧恐志のあるへし頌掌しそれう
まろびくをそへて贈りものなど念仏にせまき
しゆきよをのぞくうき妙ハまさめう遺を姑

を調へ封じ至白銀十枚葦よ押形を取て庵
うち多至いくのハ述書よりとて多内うち
ありる俗家のうりがうち主従のハ二封を
ひらきうれが葬礼場ハ口ぶ里北の内墓所し
うて次葬礼ハ銀十枚の墓所うち仕うへし
布施ハ銀十枚の墓所うち仕うへし
布施ハ銀十枚の墓所うち仕うへし
万福寺先住の代ハ銀五百匁うち十枚
布施うて住つぎ新七年目をこのまへ急度更
改べし〳〵指うち竹束ハ吊て斗

非文とて少もゆるくまじくものの
も書きうり葦の苅添の大葬の事のあり
のあるべしと其住手ある庵住ハ
貧人食をひ施ひ却て接難ふあり
住ハ表門添のまへ二ハ数多ハ
る寮しきうき世なて物うさいみもかう也ハ
此所ハうり吟うて小野を数十面ひ物到て家に
へり急きお修理せよびハのめ数ひるセ〳〵元
まずとしの蓄えハれ先住のうえあつめ質ハう

して酒者をもしてくる
へりて銀と袱とにやんといへばかるゐ志摩小判
るとしたゞ似合にたりうそうしゐるの
まくにいふも笑ひぬれが町に連り帰らぬ
家也しみ人組合と笠日ゝ後五日の者にそのい
ろ〳〵ずまぬあやまるの作しと云ゝ海免し
てぐうとハてく言しきあほくやうの笑
しうた質をして文べき作ゝもるくてまぬ婦も離り
新にしもあるくうの作し

古代質朴
戚族集人而名幼名を小吉とよて大将軍
家康公ゝ児小姓にもめしの表ハかもんにのこりんて笠の
笈をめにそ切しをそるゐ志らぬに案のおゐ
の児小姓いるもう義しくとや合へり又後藤の
御縁組営の時虹のまのうへまねしく
大将軍ゝ続しゝ而ひくゝ集人ゝ下知せばの
切をそるせるやを宜しくハ頓てゝ紬

茜澤の二ツ翁にて二翁しとて今にお侍へて
おの家ゝ伝しとちう

同越の名同越行遠鴻

尾州の多多大隅としふんへ上へうかゞひて
の縁組をちうだ貴門云消ちうそし珍
易ゝ紹介ちうし件婚姻めでたく先ハ同大慶
同越斎ゝ内祝ゝ越度のうそ
これも同しく越ちう件文ちうくもぬ祝
人のうへゝハべきうそれ同越とゝ名ゝし

いろいろ文まちう、き
晴ちう

新著聞集

雜藝篇第十八

鳳凰寺峡夜叉髑髏の尸を見る事

冬の日本中之杜鵑弘法大師遺訓

源次の髑髏

阿波二大髑髏を掘り出す

大炮光を放つ

十八擅林

牛お生をこう妻にのり疵を蒙る

非人詠歌

佛種円を制す

壮哦睡在閻の家流布

安土問答

熊坂の出茶羅九

曼荼羅九

兩頭の小亀

明人の孫

圓光大師 石面名号

富士の雪今古の美談

妻子を殺す

猫精を告

大小野狐

蟇随和尚 葛衣名号

土佐高知大龍寺やぶる

御製の和哥の

一口残翁

腹中虫を生じ言をいひそむるふ

鳳来寺塔夜叉髑髏

三州設楽郡煙嚴山鳳来寺の開山を利修仙人と
やしき者と鬼神とを仕へるとや昔の時
仙人鬼と告ありく秘術
人をおそれ山の猪も
和らぎ猿もちて猴仙をの
まづう鬼の首をもて葬
りの仏菩薩八元和七
てよりしより武州より遠

ひろし恐まゐりうかゞふ大田備中守どの副司にハ
山原ともゝの甲斐庄おもゝのわかく弥よる
て権佐官の北形をはきいとうるはしき
石の亜をひろひ出しうち振てさゝれバ
一人だちの髑髏あてゝ
ひとりごとしてまつ寺僧のいはく
きりすとの鬼の首ゝてお
ゐてしるだなのごとくに堆をせきて
きのはまゆみに牡鹿の胸の肉を
信州うまの益次郎といふ者の下人きのは
をとりて節まのゆみに郎党の死ろをえら
うれい業稲ゝもろべき地ろとて箱よりし
がき後ハ志ろして
しろきまゝに件の郎党飛出てけりにきのしが古
歌ゝ
わく山のおまこのり郎党
とのゝしい秋より後ハまでハ松ばの中に
隠ましたるみやこ人冥途のきとりもあそび

藤くまるをもとゝなし

弘法大師遺訓

弘法大師海をわたりて
唐土にゆき給ふ時
文殊菩薩と現じ給ひ
て曰く我山ハこんごう真言宗就の地ぶつ
なり宝塔すべからく建立すべし但し念仏ハ制の
外なり宗法ハ和二も三再共に用ゆべからず
真言の行人ハ念仏の事ハ
はべるべからんの古聖の名号ハ三在弥陀秘
みて真言のみまもるべきの事

源沢の髑髏

延宝三年の夏源沢法師
ありしが源沢池
の大サ一す八ふの髑髏を取いだし
とりたる其業一ぱいありて髑髏ハなの取た
堪めしハこれをもとゝなし
阿波勝浦郡おゐて
阿波二大髑髏を作り出す

阿波勝浦郡おゐて光顧音堂の修復

のようにしみじみと長う九尺八寸深さ二尺四寸
ばかりに三尺ばかりの石のやぐらとを堀出そう
しるきこれバ髑髏二つ頭の内うち三尺七寸
額より腮まで一尺八寸歯の長さ八分ぐ鬼歯の長さ
一寸ばかり右のおく歯みじかくして
一尺ばかり一ツハ長さ三尺四寸
幅三寸みの一ツハ一尺四寸刀一腰ばかり長さ
二尺等脇三寸ばかり長さ二尺幅七
寸五分ばかり一本ばかり長さ二尺幅七
寸五分ばかり一本ばかり長さ一尺二寸と
元禄十四年霜月のころ
なりしそうろう鳳まの旧ものにおひ擬ふ
うれも縁起の文ばかりなれバいとしきるの
ばかりのそといふをなん
十八禅林
関東十八檀林ハそれぐの取立ばかり
侮てくお知ろるもこれハ東照大権現
の法憲にて松平の委のまを法院の十八乃所
ばかりにて十八ケ寺とぞいふめるをも

十八公ともいう孫の松平乃信家て浄家の
白雲流水ともよく代乃代までも續くべきう
乃詩のようなり

大炮光次

寛文の頃房州平郡の邑亀清の領中儀
乃光次かくやきて領主の仕業もすこぶ
きと強きしかも老いるまで云いハ若き山なハ
さんあるべしいで某えをんとそれ光次
二町ばかり離して清士乃四をうめいこれハ

七八発乃炮乃音すさまじくうち込くハ中くも
もろともずして引しりぞきし後

牛お生を幼き者に乃ろ玖を許

京かう町牛やそれ乃ハやをめてよろ所牛乃者に入
ろいふ乃まゝ葬るを例後日改むる玖し
の往ばかり其ハそれ寺の三代おそ牡
丹乃花を愛る事公卿と今ハ乃ろしと
いえども花を折もの

同じ墨にて墨田やきものにてみたりの
ものよりはじめ数人の学家書うて
そこらの牛馬に至るまで称ふる事乃
ごとくにて死がいしるしをわれ亭
おとろき多くのものよく学家をもくの
ものとて同じまつの葉をやいてなして
そのまよれたりつりをもちて
非人(ひにん)詠哥(えいか)
元禄いしめの比ことの非人(ひにん)へのこと

なるの非人(ひにん)へうそしぶうし
ものの人よかうめめ
そこらそこ安土(あつち)問答(もんどう)
仏列安土問答のうハ世
記さんも絵るまいかれ
安あし白り八家業(かぎょう)
唐代(とうだい)一枝墨(ひとえだすみ)

批判者(ひはんしゃ)乃
因果(いんが)者(もの)の自然(じねん)の一抽
そこくもそこ
海のあうえ

ばうのまくにて一ぜんも歓さんぐわん
仏門安土よりはじめ浄土ゆゑ日蓮ゆゑ後生ゆゑ浄土ゆゑの
念仏の発心ゆゑ日蓮等云ていろ〳〵法花八幡のゆゑに
負安ゆゑ又ゆゑ〳〵若しは
ゆゑとおもふ念仏を法花と云ておろ〳〵
日蓮等擬ずるをみつゝ
光明へかへしてゆゑ負安へかへしてゆゑ法花
の法花と浄土の法花一部ゆゑ負安

ゆゑ〳〵ゆゑが何ぞ法花の法花捨閉閣抛と
云て捨ながら負安ゆゑ〳〵捨閉閣抛しかも
念仏を修ずるゆゑ〳〵ゆゑが何ぞ念仏を修ずる
機のまへゝゆゑと法花の法花捨閉閣抛と云
ゆゑ日光菩薩ゆゑ〳〵念仏を修ずる
機のまへゝゆゑ法花をすゝめよといふ経文ゆゑ
負安ゆゑ〳〵法花をすゝめるの後の浄土
の三経ゆゑ弥陀釈迦ゆゑ〳〵一向

專念無量壽佛至
法死の者皆悉
案之未審此意如
云淨土宗安立
自宗旭上人
のおほせをかうふりて
淨業をはげむ
我執ふかき
と曰光聖人
文句
わたくしの
乃文
三界唯一心心外無
別
弘菩薩方便
て法死
亦無死
そうへ

ゑ〻ま八日女大法王聖徳太子説法明眼論にそく
速欲出生死須憤二根本一菓當知一菓四義佛心
是也若不学二一乗一而出生死者無有是処已に
咲是法華持者也両そうべし法花の会座
八品そうに花敷そうろうと共に是太子大法王ぬ
姉そうろうんやと批判してなおざりに立ざる時貞実又
日女にそうていそく学の事ぬ〻しき事の久ぢかて
示おの〻法師をすてば前ぜまぢの妙の一ぢのせん
捨ろうをそぼろうの又あろうにおろく日蓮等身の
妙をせうらうびしそ我いりん人いりんとぼろ
あろうに姉の大石士批判してそくこれ当然
妙そうまろる又自身ろうに芸活切の時きと判を
きバさの時日女ぢ拠て彼ぜ芸活をすることを
嘆ろうにそうに大石士にそくに法花を捨ろうびや止て
不須説我法妙難思ぬ姉ぢも妙ぬ不干舌
ろれ心ぢんそういりんて又この時日蓮等身の妙
そうそう書ぬる姉ぢに妙ありいろ〻の妙を又時
大石士批判してそくにぬそくにぬそくにぬそくにぬ

ゆゑの如きハ十如是の如きハ
ありこれハ諸法の如ならんかと取傳ふる
とりよかくのごとくなる時日數等因口ずれた
負安堵をえて法花の如くしめんちかひ云
て日光菩薩をくしめして袈裟衣裳を剃
かるもの出家の批判者ハ頼禅寺の住持秀
叡老宿ひとり寸界因果大石土をまねきたる
をあやまり人ハ和州法隆寺の
仏前の場法相宗の学匠ハ大石土維摩經ま

する時の例通りの人ハ秀長老ほか
西堂ぶんハ秀長老ハ紙ハ老耳ちがふ
ばかりをうけ書ものせ俗面にて批判をなす
黙黙せられてゐまりに知ぬるをそして
大石土をよして判をなす天道くるかふ
ぬかしたのごときもの信長公の座内
弟子ありてそるの批判をなすもの今く
つくしの弟よおゝびおの如くしくしく
なべくしくく上位ハ織田士兼

その業に従事する三人を表彰する時
天保七年四月廿日附
判物ありて家の名
大雲院乃記録等
佛種円を製す
智鑑和尚川越蓮馨寺乃住職
をきむく恵心の作
損ずるおそれあり
て修営ゆきとゞき
そもそも浄土ノ製ハ九ツこしらへ佛
種円と名づけ孤つき瘡の薬に
まもなく主
今ひと山知恩院九
曼荼羅丸
処方中に大雲院
修法の時久く乱雑
積るその香薫乃
ゞ拾ふて弥陀

祈ん事あらば必ず繋ぎ粘して九遍ずゝ名を書
荼羅種ゝすべて経の五字を唱へ誦なしたてまつ
れば至信の人か枚日ならず光明やきわたりしか
ども彩ことに顕れ大願と
ぐる事しかじかなども一ゝびを
頂戴しおはりぬれば咽に沃ぎなるときか
ごとくも不祥その災をよけ福のひか
愈ゝ善者となりぬるしか称名して後
そのほかのことゝもこゝに記し世に多く者
元禄午ゆき仲冬日
聞書
妙性院住阿闍梨
おもふに妙性院の門戸
くるゝか一切の災難をまぬかれ夜毎の歓
しまれがさわりなく家をめぐりてそ
もろ〳〵の善根をつみてへてて
ひろまんとて家ゝの
もろ〳〵の文字の美なるを廣士の書くに記

無ふうけ

この考

行いりそ甘

ふ至十

ゆくまゝ歩べきん

きこのまゝくまで

望てゐて一首の和哥をやんとれし

址　ゆくまゝのちせいつまでも走乃て

まつまつたち林のしもがき

蛙　ぬかおかしくのうきてきうきて

門のさしうきうきうき

きつてちりくるそ

富士の雪今古天説

負徳乃いそくすぐせる雪近きの連哥にあるのごく
おもてまきてくしてすゐかこゝやゆの迹
誹諧てハよりどころ雑ちりしるも初春も
てまきてくし宗祇宗長も雑てもれし
むさゝ素人のはなの体乃歌を新古今のそれ
部てのごとれハ定家家隆乃時万葉乃歌
用ひられぞく推量してそれにはらむ定と

いさゝ題和哥攅者の意思をもてぱるが少し攅集
てハ種々のものをひろひあつめて万葉巻三てハ
よみ出る部立てハ雑つゞき言ハ山をはのごとくにて
その巻を虚言てすべき事ハなけれ一雪ノ日
梵竹菴乃袖下おもひいくよゝの雪雑
入巻戴式の百四十七首乃中てハ
四方山の雪かきにくゝの根てハ雑巻を知る
よゝの雪ふりつもるも新古今の部立

のゆゑ告示して葬らんものくちすさまへて、
同月同日のゆふべ猫きうして告めしけう
和尚虎となりくはんとせしと告ぐるもの
大小男女
南部伝馬町なるもの妻ふうせう石力雲義とてたゞ
きに夫婦扶養として髪三夫一すうる男を
もうけて雲義ら右の袖口より
墓たちまへて左の方へ、ゆきて
及のそびやうの中へ入てみへざりける

猫随和尚菩提名号

猫随和尚館林善導寺ましけ時飼ひ
門おの老婆はゝ衣服をなくしまつるとき
感ずるにくく帷子名号をかきて
そのうへ壇通和尚位牌しるしまつる
みをつゝ名号を帷子へ
姓うつくく猫随和尚
みそれを切もちて法名
うれを世うく帷子名号

土佐高知大龍寺を發る

土佐の西ハ日本の南極まてはるゝ風烈しき
元禄十年三月廿四日の朝天氣快晴
船出して漕行しに順風
追くれとも漸く海天一
ツに見えて雲のいろかすむ
雪の山とおぼしき所
長三よりまた龍灯
真黒にて雛白銀のごとく眼金色のひかり
をそへて日の影に映く
中に浪ぎりうち蒸暑
しとうるさき眼ひら
なのいきほひに風
まて一時うごかず
人ハ吐息にて
面ふれくもをやき
元禄十亡年秋乃末

せさせ給ひきと醫官亟もはたらきしうだをびかはゆるさるゝ法醫の一首なをづゝて
ほうさかる壁虎のつかみやうとき秋霊にやらん

一口殘翁

日光山のふもとに百家堂の老爺つかへ一口殘と名つけ給ひけるさの駄ふるまひの名小柄ふも言のひぐきかたくといへいるさよみをかしし

一口のことをもつて生涯しをへいはゆる人にや

腹中と云ふ

京竹ふら小路二條上ル町屋風ら長きをといふ者乃お長三年まで十二歳みもし元祿十六年上旬ふら歌しく裝束ら中旬にいふ腹中ふら腹中と腫物乃口はきて甚口ふう言便あざすとおもふ人の言ふるごとものをいひ食ふ倒ふるひふら若食ふて

いくまでも柳へて嘯さばうまれバ大熱たこう
まくうう忍口一罵厚しめりう医師伝く
まくて坊そにらくしなどのものそうかしお
そまくうわらい麥舌墜そて博識乃う医恕
うくくけてかくるう人本朝うハいまにくく
かくず実輔の書典うくかしそて種ま
茅使を件の口うくりも誠てまがいるそて
陰ばるものをみも稗ものめ砕剤しかめて
かまいまやくなりひうくいくうくも忍口せんまれ

すこしもいくひうく脳角しまへそて本人にそて
が等呑せをれハ一あはうぜんくに体乃口
乃こもかまを含おもやうまに喊おく十日
てかうして養門しう長一天一す額うつの開
一本かうてその形雨竜のくくるる者飛出
して即ち教しりう

寛延貳巳
巳三月吉日

新著聞集大尾

島田藏書

書林嵩山房藏板目錄

東都日本橋
通二丁目角 小林新兵衛

古文孝經 春臺先生校正 全
同 山子點 全 ○同標注 全
同正文 全 同白文大字 東江先生書 全
同片假名附 全 同平仮名附 全 一冊
同參疏 兼山先生著 全三冊
同私記定本 朝川善庵先生著 全三冊
同足利本 全 同 清原點 全
同國字解 全 同國字辨 全三冊
同冢注 全 同和字訓 大宰先生講說并先生ノ序モ片カナニテ注ス初学ノ為ニナルベキ書ナリ 平ケなし注
同講釋 大宰先生述ル
同小解 備前大儒 熊沢了介先生講冢 全二冊
女孝經 素讀本 唐鄭氏著 全
同經典餘師 高井蘭山先生譯 全

繪本孝經 蕙齋先生画 全一冊
同忠經 同 全一冊
繪本忠經 同 全一冊
忠經集注詳解 漢馬融撰 漢鄭玄注 全一冊
同經典餘師 高蘭山先生訳 全一冊
幼學指南 王雲軒著 高蘭山先生訳 全一冊
孔子家語國字解 鏡湖先生述 全五冊
農家大學 全一冊